

Y12b

京都大学における金環日食観察会の実施と効果についての考察

柴田一成、北井礼三郎、 本田敏志、石井貴子、大野照文、黒河宏企 (京都大学)、ほか京大天文関係者一同

今回、我々は日食を安全に観察する場所を提供し、科学に興味を持ってもらうことを目的として「282年ぶりの再会@京都」と題し、京都大学で金環日食の観察会と講演会を行った。観察会は周辺で最も多く人を収容できる大学のグラウンドで行い、可能な限り来訪者を受け入れるものとして特に参加者の制限は行わなかった。そのため、観察用のメガネに加えて、投影版や手鏡、ピンホールを使ったものなど様々な観察方法で日食の様子が見られるように準備し、ボランティアを含め100人近い人員で対応した。また、直前の1週間には京都府教育委員会と連携し、安全な日食観察などについての出前授業を行い、京大総合博物館においては「京大日食展コロナ百万度を超えて」と題し日食に関する古代の歴史から最新の観測成果までを紹介するイベントも行われた。当日は晴天に恵まれたこともあって、予想をはるかに上回る約8000人ももの人が集まり、これまでに無い規模の観察会となった。今回の観察会では日食観察による新たな発見に加えて、大勢で見ることによって印象がさらに深まったとの声が多く聞かれた。また、ボランティアやスタッフとして参加した学生にとっても一般市民への普及活動について学ぶ良い機会であり、太陽についての認識をより深めるものとなった。しかしながら、広い地域で観察可能な現象にも関わらずわざわざ観察会会場へ足を運ぶ理由として、日食が起こることはマスコミなどを通じて知っているものの、やはり観察方法が分からないと言った声も聞かれた。これはマスコミなどを通じて安全な観察方法を周知徹底したことにより、誤った観察による危険性が十分認識された結果であるが、さらに安全な観察方法の提示と供与が求められたのであろう。本発表では、観察会での取り組みとその反応や効果について議論を行う。